

「せとうち発見の道」企画展

「弥生時代人のデザイン

～文様や造形に込められたもの～」

2022年3月1日（火）～5月29日（日）

瀬戸内市民図書館

市内の遺跡で見つかった土器などには、文様や装飾が施されたものがあります。単に美しいというだけでなく、祈りが込められているものもあります。

また、文様や造形が時代や地域の特徴を表していることもあります。弥生時代の資料を中心に、特徴的な文様や装飾をもつものを紹介し、デザインに込められた意味を考えながら、瀬戸内市の文化を再発見します。

◆生活用具を装飾する文様◆

弥生時代は、諸説がありますが、およそ紀元前3世紀頃から紀元後の3世紀頃、つまり、約2300年前頃から1700年前頃という時代です。瀬戸内市は、弥生時代には、すでに多くの人々が住んでおり、生活の跡が遺跡となって残っています。

弥生時代の遺跡からは、当時の人々が使った土器などの道具が出土します。土器には、様々な「文様（もんよう）」が施されています。「模様」が自然のものを含むのに対して、「文様」は人工的につけられた模様のことを言っています。

弥生時代の人々は、どのようなデザイン感覚を持ち、文様にどのような思いを込めていたのでしょうか。

◆弥生土器に見られる文様

土器の文様は多くの種類が知られており、それぞれ名前が付けられています。

文様を施す道具に由来する文様名としては、「ヘラ描き文」や「櫛（くし）描き文」があり、形状に由来する文様名としては、「直線文」、「斜線文」、「波状文」などがあります。

また、特徴的な文様として、相対する斜線が連続する「綾杉文（あやすぎもん）」、山形が連続してノコギリの歯のように見える「鋸歯文（きょしもん）」、帯状の粘土を土器の表面に貼り付けて飾る「貼付突帯文（はりつけとったいもん）」、木の葉のような文様を連続して描く「木葉文（このはもん）」などもあります。



甕（かめ）の文様

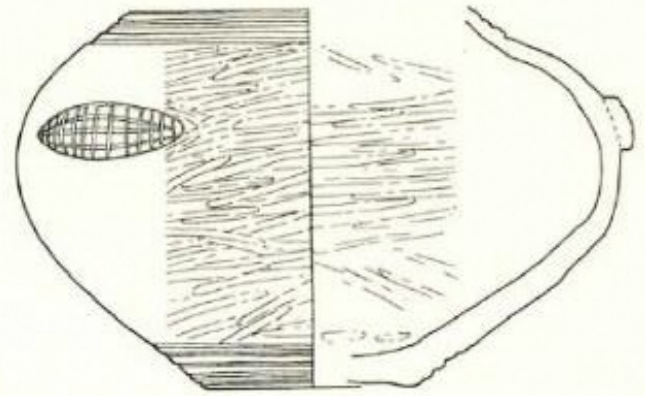
弥生時代前期（約2200年前）
門田貝塚（邑久町尾張）出土

口縁部が外側に反っており、「刻み目」が入れられています。また、口縁の下には、5本の「ヘラ描き沈線文（ちんせんもん）」が回っています。



木葉状の貼付突帯をもつ壺

弥生時代前期（約2200年前）
熊山田遺跡（邑久町山田庄）



熊山田遺跡から出土した「広口壺（ひろくちつぼ）」です。頸部から短く外反する口縁は欠けています。胴部は非常に張りが強く、どっしりとした形態で、底部はわずかに上げ底になっています。

頸部に4本、底部近くの胴部に5本の、「ヘラ描き平行沈線文」が施されています。

張りの強い胴部の外面には、「木葉」状の貼付突帯が、同じ高さに5カ所つけられています。「木葉」状の貼付突帯には、ヨコ方向に主軸となる1本の沈線、その上下にやや弧を描く2本の沈線が施され、その後、タテ方向に13本の沈線が施されています。

このような、胴部に「木葉」状の貼付突帯をもつ広口壺の類例は、他に知られていないようです。（『邑久町史考古編』282頁より）

特殊壺形土器（とくしゅつぼがたどき）

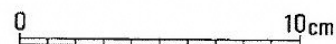
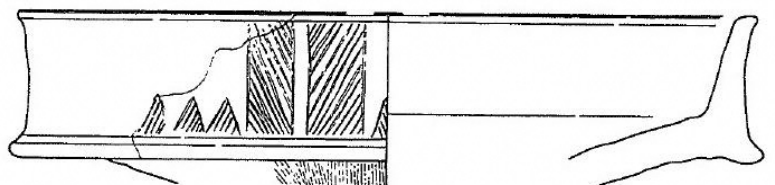
弥生時代後期（約1800年前）
「我城山」（邑久町上笠加）採集資料



この土器は、郷土史研究家の長瀬 薫（ながせ・かおる）が、「我城山」で採集したのですが、「我城山弥生墳丘墓（がきやまやよいふんきゅうぼ）」から出土したものとみられています。

特殊壺形土器の口縁にあたる部分のみ残っていますが、タテ方向の細い2本線で区画され、そこに、綾杉（あやすぎ）状に相対する形で斜線が引かれています。さらに、その左右に「鋸歯文（きょしもん）」と呼ばれる文様が3個以上、描かれています。

この特殊壺形土器は、ほかの出土遺物とあわせて、共飲共食儀礼をともなう埋葬祭祀に使用された道具類ではないかと考えられています。



国城遺跡出土大形器台の文様

弥生時代後期（約1800年前）・国城遺跡（邑久町上笠加）

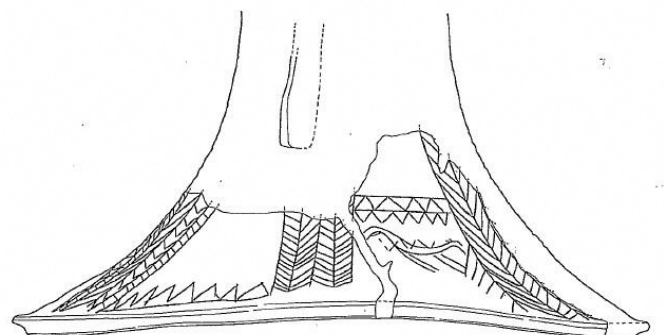
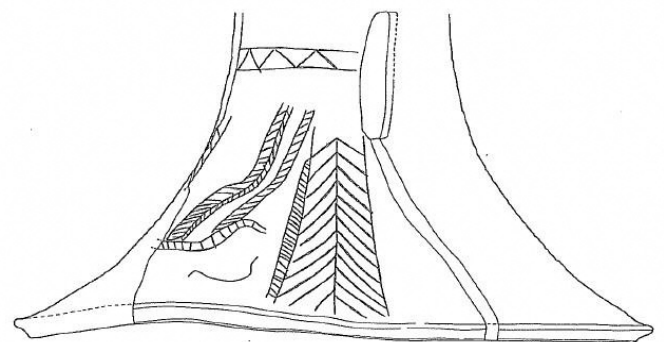
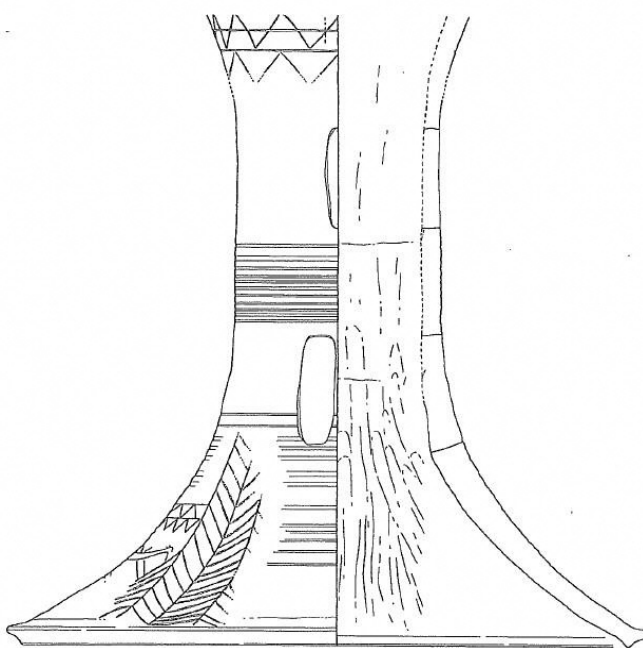


国城遺跡（くにしろいせき）は、正式な発掘調査が行われていませんが、採集品などが邑久郷土資料館に保管されています。その中に、特徴のある文様が刻まれた「器台（きだい）」があります。

器台は、上部が欠損していますが、残存高が37.9cmで、脚部径36.6cm、筒部径12.5cmとなっています。そして、長方形の透孔（すかしあな）や「平行沈線文」「鋸歯文」など、へら描きの文様、さらには絵画風の図柄で装飾されています。

絵画風の図柄は、他の事例との比較から、「船に乗った鳥人（シャーマン）」や「龍（ドラゴン）」あるいは「鹿」に起源をもつものではないかと推測されています。他の事例では、神話を表現したもの、祭祀を執り行っている場面を表したものと考えられています。

いずれにしても、特別なものとして作られたと考えられます。



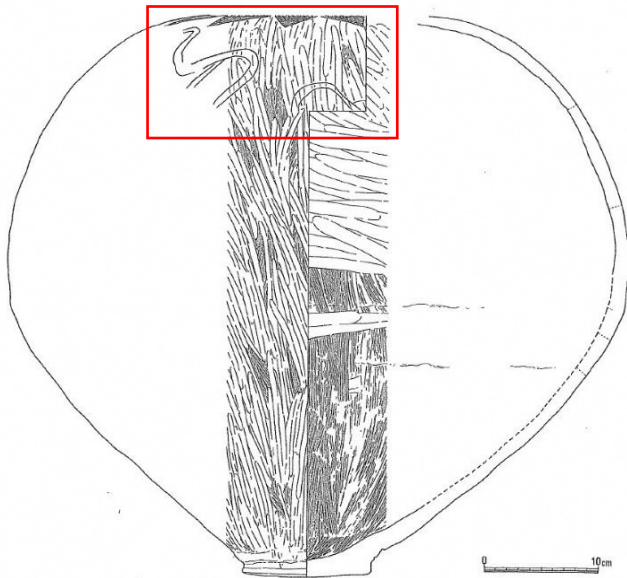
助三畑遺跡出土土器棺の線刻文様

弥生時代後期（約1800年前）・助三畑遺跡（邑久町尾張）

土器棺は、口縁部を除去した壺を棺身としたもので、上部に線刻の文様があります。文様は、ヘラ描きの「鋸歯文（きょしもん）」をめぐらせているほか、絵画風の線刻があります。

絵画風の線刻は、「s」字状の胴体に、「三日月」状の足を描いた「龍」の表現と考えられています。つまり、龍を描いた大形の壺を棺に使用したということですが、棺は、出土状況から、龍を描いた部分を上にして埋納されたと見られています。

弥生時代の後期、この地に生きた人々は埋葬に際してどのようなことを考えていたのか、それを知るための重要な資料となっています。



左図 部分拡大写真



木葉文（このはもん）をもつ土器

弥生時代前期（約2200年前）

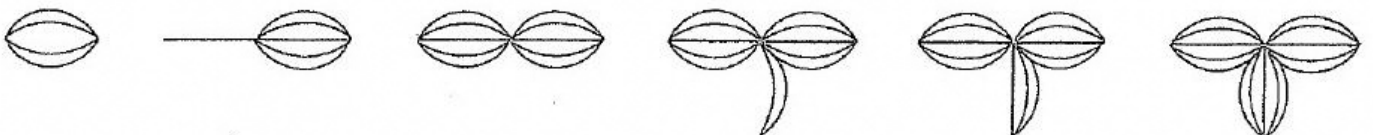
熊山田遺跡（邑久町山田庄）

熊山田遺跡（くまやまだいせき）では、「木葉文」をもつ土器が多数見つかっています。

「木葉文」とは、木葉のような形をした文様を「X」字状に4枚並べるなどの特徴をもった文様のことを言います。壺の肩部分に、ぐるりと施されている例が多いようです。

『熊山田遺跡』（2004年、邑久町教育委員会）では、熊山田遺跡で見つかった土器の木葉文について、どのようなパターンがあるか、どのような描き方をしているか、詳しく分析しています（93～97頁）。

この土器に描かれた「木葉文」の描き順（左から右）



【全体を通じて参考にした文献】

邑久町史編纂委員会編『邑久町史通史編』（2009年）・『邑久町史考古編』（2006年）